

科学研究費助成事業（学術研究助成基金助成金）研究成果報告書

平成25年6月7日現在

機関番号：14401

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2011～2012

課題番号：23720104

研究課題名（和文）

森槐南を中心とする幕末・明治期日本漢文学の研究

研究課題名（英文） A Study on Mori Kainan and the Classical Chinese Literature Written in the 19th Century Japan

研究代表者

合山 林太郎 (GOYAMA RINTARO)

大阪大学・文学研究科・講師

研究者番号：00551946

研究成果の概要（和文）：

本研究は、明治期を代表する漢詩人森槐南（文久3年〈1863〉—明治44年〈1911〉）の文学活動について、総合的に把握し、近世・近代の日本漢詩史、明治文学史、東アジア文化交流史など、様々な文脈のなかで分析・評価するものである。具体的には、槐南の事跡および詩作、槐南の漢詩観、呉汝綸をはじめとする清末文人と槐南との交流、明治文学全体に対して槐南が及ぼした影響などを、刊行された詩文集、新聞雑誌資料、自筆書入れが入った蔵書資料などの資料を調査することによって明らかにした。また、槐南に関する知見を手がかりに、近世後期から明治期にかけての日本漢詩の理解について、新たな構図を提示した。

研究成果の概要（英文）：

The purpose of this study is to illustrate the entire literary activity of Mori Kainan (1863-1911), one of the most famous Chinese classical poets of the Meiji period. The features of the poetry works of Kainan and his school, the relationship between Kainan and the literary personality of the Qing Dynasty, such as Wu Shu-Lin, the influence of Kainan's poems and essays on the literary works of the Meiji period, have been analyzed with a thorough investigation into related historical documents. The tradition of the Chinese classical poetry production in the 19th century Japan has also been taken into consideration.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
交付決定額	2,000,000	600,000	2,600,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文学・日本文学

キーワード：日本漢詩、明治文学、漢文学、森槐南、森春濤、呉汝綸、日中交流

1. 研究開始当初の背景

森槐南は、明治期を代表する漢詩人であり、また、優れた中国詩学の研究者である。明治初期の東京漢詩壇に君臨した森春濤の息子であり、明治中期以降は、東京漢詩壇を率いた。また、官僚でもあり、伊藤博文の側近として活躍している。漢詩だけではなく、填詞制作や戯曲研究など、中国古典学に関する多くの領域で優れた業績を残した。

この槐南の文学活動は、様々な文脈において重要な内容を含んでいる。たとえば、槐南は、古代から清代にいたるまで、大量の詩を

学んでおり、その知識修得の形跡を、蔵書への自筆書入れや詩話、評論、注解というかたちで残している。槐南の動向を見ることによって、幕末・明治期の中国詩学の日本への流入の主要な部分を明らかにすることができるのである。

また、槐南は清や朝鮮へも渡航し、日本においても多くの清の文人と唱和しており、東アジアと日本との文化交流について考察する際に、格好の研究対象となる。

今日の日本漢文学研究にとっては、槐南の近世漢詩に対する考え方も重要な情報と言

える。1960年代以降、日本近世文学は、西洋詩や近代詩に通じる抒情性に焦点が当てられ、近世後期の清新性霊派と呼ばれる詩人たちの作品が高く評価される傾向があった。しかし、槐南は、こうした近世後期の漢詩人たちよりは、詩の格調を重んじた近世中期の漢詩人に注意を払っている。槐南の詩観を分析することは、今日の研究が見落としている近世日本の漢詩の性質を発見することにもつながると考えられるのである。

幕末・明治期の漢文学については、すでに一定の研究の蓄積がある。ただ、これまでの研究は、幕末・維新时期という混乱期における漢詩人の生き方や、明治初年の新事物の漢詩文への取り込みなどの点に、焦点が当てられがちであった。

槐南については、神田喜一郎『日本における中国文学』(1965-67年)をはじめとして、数多くの先行の論考があるが、その多くは、填詞や戯曲研究における槐南の業績に偏る傾向があった。入谷仙介『近代文学としての明治漢詩』(1991年)などが、槐南の漢詩の魅力の説得的に描出しているものの、漢詩人としての槐南の全貌は、なお解明されていない。

槐南の文学を、彼が学んだ中国詩学の伝統に十分注意を払いつつ、日本漢詩史や明治詩歌史をはじめとする、多様な文脈のなかで分析・評価することが喫緊の課題となっていたのである。

2. 研究の目的

本研究における主要な目的は以下の5点である。

(1) 槐南の文学活動について、彼の詩作、評論、注釈などを網羅的に収集し、その全体像を明らかにする。また、官吏としての職歴をはじめ、槐南の伝記についても明らかにする。これら総合し、槐南の著述及び伝記に関する総合的な知見を得、槐南研究の基盤を構築する。以上の調査に加え、槐南の父春濤の詩作、また、槐南周辺に集った若手詩人の事跡についても情報を収集し、槐南を中心とする明治東京漢詩壇の概況を把握する。

(2) 槐南の文学観や詩観の特徴を明らかにする。諸雑誌に掲載された評論、詩話、蔵書書入れの分析により、個々の作品を槐南がどう評価していたかといった微細なレベルで、槐南の詩についての理解のあり様を把握するとともに、こうした調査で得た知見を中国詩学の伝統を踏まえつつ分析し、槐南の業績を、今日の漢文学の研究において定位する。

(3) 槐南の近世日本の漢文学に対する言及を調査し、槐南の近世日本の漢詩についての評価の有り様を明らかにする。また、実作と詩論の両方を分析しつつ、江戸期と明治期の漢文学の有り様を比較し、両者の間の連続性

と差異とを考察する。これらの調査により得た知見に基づき、今日の日本文学研究領域における近世・近代の漢詩の把握のあり方について再検討を行う。

(4) 槐南及び彼を中心とする明治期の漢詩壇の文学活動について、新体詩や和歌・俳諧をも含めた明治詩歌史のなかでの位置づけを明らかにする。槐南が活躍した明治中期は、新体詩が登場し、俳諧や和歌の革新がなされた時期にあたる。槐南の文学活動が、同じ時代の詩歌の動向に与えた影響や、槐南の詩観と明治期の文学観の相違を考察し、漢詩の動きを明治期の他の詩歌形式と統一的な視座によって捉える。

(5) 槐南と清や朝鮮の文人との交流について明らかにし、近代における東アジア文学交流の様態について知見を得る。槐南は、伊藤博文に随行して清や朝鮮へ渡航し、当地の政治家・学者の多くと交流している。また、来日した清・朝鮮の文人とも唱和を行なっている。これらの事跡を詳細に調査することによって、東アジアの文化交流史において、槐南、そして明治漢詩人たちが果たした意義について考察する。

3. 研究の方法

本研究の方法は、以下の5点に要約できる。

(1) 槐南の伝記研究に関しては、『槐南集』所収の詩から槐南の事跡をうかがうと同時に、新聞雑誌を網羅的に調査し、槐南の著述及び槐南に關係する情報を得た。具体的には、『国民之友』、『城南評論』、『早稲田文学』、『太陽』などに掲載された槐南の中国詩学に関する評論、『毎日新聞』、『東京日日新聞』、『日本』などの新聞に掲載された槐南の詩及び批評、『新詩綜』、『百花欄』、『花香月影』、『随鷗集』などの明治中期の主要な漢詩雑誌中の槐南に關係する記事について、網羅的に収集し分析した。このほか、国立公文書館に蔵される明治政府の任免官に関する記録や『官報』から、槐南の官吏として職位についての情報を得た。

(2) 槐南の詩学については、まず、槐南文庫所蔵漢籍に対する自筆書入れを網羅的に調査した。とくに、清・朱彝尊『曝書亭詩録』、唐・杜甫『杜工部集』、元・薩都刺『雁門集』などといった読了日の明瞭なものは集中的に検討を行い、書入れ中に引用された文献を特定し、槐南の読書状況について可能なかぎり精緻な情報を得た。次に『新新文詩』に連載された「詩話」「詩問」を精読し、その中から槐南の詩観を整理・抽出した。こうして得られた情報について、後年、漢詩雑誌『新詩綜』に連載された随筆「麴壘間談」などを、若年期の評論と比較し、槐南の詩観が時期とともにどのように変化したのかを分析した。さらに、槐南が著した詞華集『唐詩選』の注

積書『唐詩選評釈』（1892-96年刊）を精読し、槐南の中国詩への評価・解釈のあり方を検討した。具体的には、中国における『唐詩選』の注解書や、宇野明霞編『唐詩集註』などの近世日本において流布した『唐詩選』の集注本、服部南郭『唐詩選国字解』をはじめとする日本の国字解などと比較しながら、槐南の唐詩解釈史上での位置づけを探った。なお、『杜詩講義』をはじめとする中年以降に記された注釈についても、合わせて検討を行った。

(3) 槐南と近世日本漢詩との関係については、近世日本漢詩への最も直接的な論究である「徳川時代の詩学」（『国民之友』1892年2月～11月）を主要な調査対象とした。この評論において使用される詩学用語について、明清や近世日本の詩論を参照しつつ分析し、槐南の詩学形成の背景を探った。また、槐南の詩への批評状況を、今日の研究と対照させながら考察し、槐南の近世漢詩に対する認識を今日の研究に導入する可能性を探った。

(4) 明治詩歌史における森槐南の位置づけに関する調査においては、槐南と同時代の文学者の槐南に対する評価を網羅的に把握することを、考察の基礎とした。また、『新体詩抄』の編者であり、漢詩人としても名が知られていた井上哲次郎について検討を行った。この井上は、槐南とも交渉があり、その自筆漢詩稿や抄書・雑記類が、国立国会図書館は東京都立図書館に所蔵されている。これらの資料を調査し、井上の文学観や漢詩の学習過程について知見を得るとともに、槐南の詩観との比較を行った。さらに、これらの検討を行うことにより、明治期の新たな文学思潮と槐南との関係について考察した。

(5) 森槐南と東アジアの文人との交流に関しては、『槐南集』に収録された清・朝鮮の文人との唱和詩や、槐南が清・朝鮮に渡航した際に作られた海外詠を主要な調査対象とした。また、呉汝綸や文廷式といった重要な中国文人との交流について、新聞雑誌に掲載された記事を収集し考証を行った。明治初年以降の在日本清国公使館周辺の清の文人と、日本の漢詩人や漢学者との唱和の事例を調査し、槐南の唱和のあり方と比較した。

4. 研究成果

上記のような検討を経た結果、次のような成果及び知見を得た。

(1) 森槐南の文学活動について、調査によって得られた情報に基づき、森槐南の漢詩制作などの文学活動、官吏としての職歴や家族関係、交遊関係の出来事をまとめた年譜を作成した。また、槐南が諸新聞雑誌に発表した評論や随筆を集めた著述一覧をまとめ、さらに、『毎日新聞』『東京日日新聞』『日本』などの新聞漢詩欄において槐南が記した批評

のうち、重要な情報を含むものを抄出した漢詩評データ集を編んだ。これらの資料については、今後、さらに調査を行い、情報を補完した上で発表したいと考えている。

(2) 槐南の詩観について明らかにした。森槐南文庫所蔵本中の槐南自筆書入れや『新新文詩』に掲載された「詩話」などを分析し、若年期の槐南が、朱彝尊「西湖竹枝詞」や「鴛鴦湖櫂歌」など、清初に作られた竹枝詞に好感を抱いていたこと、詩に詠われた明末清初の歴史に関心を払いながら、清代の詩を読んでいることを明らかにした。また、朱彝尊「玉帯生歌」の末尾句の異同などについて、槐南が複数回、異なる文脈で言及していることを指摘し、槐南が詩を評価する際には、表現、道徳など、様々な観点から検討していたことを論じた。このほか、『唐詩選評釈』においては、明・唐汝詢の解釈を多く参照しつつ、王漁洋や沈徳潜ら清代詩人の注釈を引き、理解を深めていることを確認した。

(3) 槐南の業績を手がかりに近世日本漢詩に考察を加えた。具体的には、槐南の擬古詩に対する考え方について分析した。槐南は、「徳川時代の詩学」において、同じ近世日本の古文辞派によって作られた擬古詩であっても、荻生徂徠の「烏生八九子」と服部南郭の「独漉篇」とでは、異なる評価を下している。こうした槐南の理解は、古文辞派をはじめとする近世中期の詩人を考察する際、大きな示唆を与えるものである。

また、槐南の文学活動を、近世後期から明治期へと続く漢詩のなかで位置づけることを試みた。周知のとおり、近世後期においては、性靈論が詩壇に浸透し、宋詩の影響を強く受けた作品が多く作られている。ただ、その一方で、宋詩風の詩が持つ表現の弛緩を厭い、唐詩風の詩を推奨する声も上がるようになる。こうした唐詩を尊重する詩人たちに見られる、言葉やイメージのつながりを重視する感覚は、槐南の詩観と近似しており、巨視的に見れば、両者は一つの潮流と見なし得ることを論じた。

(4) 明治期の新たな文学の潮流と槐南との関係について考究した。まず、大町桂月や正岡子規、江見水蔭らが、槐南を中心とする明治中期の若手漢詩人を、重要な文学集団として好意的に評価していたこと、森鷗外をはじめとする多くの文学者が漢詩壇と密接に関係していたことを明らかにした。また、井上哲次郎については、自筆抄書類の内容、『郵便報知新聞』『東洋学芸雑誌』における井上の漢詩文作品の掲載状況や、「孝女白菊詩」の制作の過程を把握することによって、彼の漢詩人としての活動全体について知見を得た。その上で、若年期の井上が、和漢の漢詩を大量に抄出し漢詩の学習に励んでいたこと、その一方で「周到詳密」を尊ぶ文学観・

文章観を持っており、必ずしも従来の漢詩漢文を肯定してはいなかったことを指摘した。井上の考え方は、とくに漢詩文の伝統をどうするかという点で、槐南の詩文観とは対照的である。

(5) 槐南と清の文人、とくに呉汝綸・吳辟疆との交流について分析した。まず、『国民新聞』の漢詩欄及び記事から、詳細にわたる情報を得た。呉汝綸・吳辟疆と槐南の唱和詩の内容から、彼らが 20 世紀初頭の清を取り巻く国際的な政治状況を意識しつつ、詩を贈答してしており、主として友誼を内容とする明治前期の唱和と、その様相を異にしている。また、呉汝綸や吳辟疆からの影響により、槐南をはじめとする東京の詩人たちが、宋詩の表現をより積極的に摂取するようになったことについても指摘した。このほか、槐南と文廷式や章炳麟との交渉についても、同時期の日清文人の交流と比較しつつ、その位相を明らかにした。

なお、朝鮮との関係については、槐南が 1888 年の朝鮮渡航の際に制作した詩を分析し、とくに「釜山」詩中に描かれた壬辰戦争のイメージについて、近世期の漢詩と比較しつつ、評価を行った。

5. 主な発表論文等

[雑誌論文] (計 6 件)

(1) 合山林太郎「幕末京撰の漢詩壇—広瀬旭莊・河野鉄兜・柴秋村を中心に—」(『日本文学』60 巻 10 号、日本文学協会、pp30-39、2011 年 10 月)

(2) 合山林太郎「幕末の歴史人物批評—幕末昌平鬻関係者の作品を中心に—」(中野三敏・楠元六男編『江戸の漢文脈文化』pp103-118、竹林舎、2012 年 4 月)

(3) 合山林太郎「性霊論以降の漢詩世界—近世漢詩をどう捉えるか—」(『日本文学』61 巻 10 号、日本文学協会、pp67-76、2012 年 10 月)

(4) 合山林太郎「森槐南と呉汝綸—1900 年前後の日中唱和—」(『東アジア海域叢書第 13 巻・蒼海に交わされる詩文』、汲古書院、pp325-348、2012 年 10 月)

(5) 合山林太郎「藤井竹外「芳野」小考—龍草廬「題山崎妙喜菴」詩との類似について—」(『混沌』36 号、PP31-34、2012 年 12 月)

(6) 合山林太郎(康盛国翻訳)「近世・近代日本漢詩文に描かれた壬辰戦争」(『慶南学』33 号、韓国慶尚大学校慶南文化研究院、pp. 47 -63、2012 年 12 月、原韓国語)

[学会発表] (計 2 件)

(1) 合山林太郎「井上哲次郎と明治 10 年代の漢詩—漢詩改良の具体相をめぐって—」(日本近代文学会平成 23 年度 11 月例会、日本近代文学会、2011 年 11 月 19 日)

(2) 合山林太郎「近世・近代日本漢詩文に描かれた壬辰戦争」(壬辰戦争 420 周年国際専門家学術会議、韓国・慶尚大学校、2012 年 12 月 4 日)

6. 研究組織

(1) 研究代表者

合山 林太郎 (GOYAMA RINTARO)

大阪大学・文学研究科・講師

研究者番号：00551946

(2) 研究分担者

なし

(3) 連携研究者

なし